

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 (教育学)	氏名	池田 吏志
学位授与の要件	学位規則第4条第1・②項該当		
論文題目 重度・重複障害児の QOL を高める造形活動の指導理論に関する研究			
論文審査担当者			
主 査	教授	柴 一 実	
審査委員	教授	伊 藤 圭 子	
審査委員	教授	若 松 昭 彦	
審査委員	准教授	中 村 和 世	
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文の目的は次の2点である。第1点目は特別支援学校の重複障害学級をフィールドとしたエスノメソドロジーによる質的研究を通して、(1)造形活動における重度・重複障害児と教員との関わり、(2)教員による学習指導の方略、(3)ティーム・ティーチングにおける教員間の連携について理論化することである。第2点目は構造化された理論を用いて学習指導の効果を検証するためにアクション・リサーチを実施し、最終的に重度・重複障害児の QOL (Quality of Life) を高めるために効果的な造形活動の指導理論を構築することを目的としている。本論文は上記の研究目的に従って、三部 (全 10 章) から構成されている。</p> <p>第1部では、国内外の重度・重複障害児を対象とした造形活動に関する先行研究の成果と課題を検討している。従来の研究は、運動機能の補助を目的とする教材教具や制作方法の開発に関する研究が中心であり、(1)重度・重複障害児と教員との関わり等の環境要因に着目した学習指導の研究が不十分であること、(2)重度・重複障害児を対象とした研究の多くが研究成果の汎用性に乏しいこと、(3)重度・重複障害児を対象とした QOL 評価の明確な方法が確立されていないことなどが課題であることを指摘している。</p> <p>第2部では、糸賀一雄の「共感」概念、及び、Vygotsky の社会文化的アプローチを用いて人的環境を重視した造形活動の学習指導のあり方を提示し、これを理論的枠組みとして、広島県内の特別支援学校2校を対象に約7カ月にわたるエスノメソドロジーによる質的研究、及び、3都府県の特別支援学校に所属する専門教員を対象とした半構造化インタビューによる調査を実施し、重度・重複障害児を対象とした造形活動の構造を提示している。質的データの収集、分析、解釈には、木下 (2007) による「M-GTA」の質的研究法を主に用い、造形活動の学習指導を構成している9項目のカテゴリー、25項目の下位カテゴリー、43項目の概念を抽出し、それらの関係性を明確化した理論を示している。9項目のカテゴリーは、「教材教具を介した支援」、「コミュニケーション」、「社会心理的環境づくり」、「実態把握」、「題材開発」、「評価」、「主担当教員の役割」、「副担当教員の役割」、「教員集団の役割」であり、これらのカテゴリーで表される指導が、下位カテゴリー及び概念で示される指導とともに、重度・重複障害児を対象とした造形活動を成立させる際にどのように相関的に働き合うのかを構造化して示している。</p> <p>第3部では、第2部で示した造形活動の理論に基づいて学習指導を開発し、その学習効果を</p>			

3期にわたるアクション・リサーチによって検証している。検証に際しては、重度・重複障害児の「意欲」と「能力発揮」に焦点を当てた6段階のルーブリックを用いたQOL評価法を開発している。

第1期アクション・リサーチでは、A特別支援学校小学部（重複障害学級）に在籍する重度・重複障害児を対象に、第2部の質的研究から得られた造形活動の理論を援用して学習指導の効果を検証している。結果として、開発した学習指導は、重度・重複障害児のQOL向上に対して有効であることが示され、検証後の考察から、造形活動では重度・重複障害児は「静止・微弱運動型」と「衝動・不随意運動型」の2類型に分けられること、また、類型に応じて主担当教員と副担当教員の役割を変える必要があることが示されている。またその過程において、類型に応じた教員の役割を示す「実態階層・教員役割表」を開発している。第2期アクション・リサーチでは、第1期アクション・リサーチの成果と課題を踏まえて、重度・重複障害児のQOLを高める「授業改善」の方法を研究し、児童生徒の興味関心を中心に造形活動の内容と指導方法を継続的に修正し発展させる方略を示す「授業改善フローチャート」、教員の省察と効果的な学習指導の開発を促す「授業改善チェックリスト」を開発している。第3期アクション・リサーチでは、異なる重度・重複障害児を対象として第1期及び第2期のアクション・リサーチで開発した学習指導の汎用性を検討している。結果として、異なる重度・重複障害児に対しても有効性が認められ、学習効果を高めるために、事前のみでなく授業プロセスで適時行う「変動的実態の把握」を組み入れた「実態の二層性モデル」を提案している。

総合考察では、第1部、2部、第3部の研究成果を踏まえて、「確定的実態の把握」、「題材開発」、「授業実践」、「評価」、「変動的実態の把握」、「授業改善」の6項目にわたって構造化された重度・重複障害児のQOL向上をねらいとした造形活動の指導理論を構築している。

本論文は、以下の2点で高く評価される。

第一に、重度・重複障害児を対象とした造形活動の学習指導に関して、先行研究において個別事例に止まっていた人的環境に焦点を当て、「教員と児童生徒との関わり」、「教員による学習指導の方略」、「教員間の連携方法」について、それらがどのように関連し合っているのかを全体的に俯瞰し、構造的に示した点である。特別支援教育と美術科教育の融合研究分野では、個々の教員による実践研究の蓄積があるものの、造形活動の学習指導は理論化されておらず、質的研究を通して抽出された学習指導を構成する項目とそれらの関係性を示す理論を構築したことによって、造形活動の学習指導の効果的な展開が可能になると考えられる。

第二に、重度・重複障害児のQOLを高める造形活動の学習開発を通して新しい指導理論を構築した点である。本理論は、造形活動の学習展開において、教員と児童・生徒との双方向的、共同的な関係性を重視し、児童・生徒の身体的能力の向上のみでなく、情緒的安寧の保持や楽しさを基盤とした意欲の向上、能力の最大限の発揮を目指す点に特色がある。QOLの視座から重度・重複障害児の造形活動の学習指導のあり方を示した研究はこれまでになされておらず、本論文によって、重度・重複障害児を対象とした造形活動の新しい方向性が切り拓かれることが期待される。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成28年 2月5日

